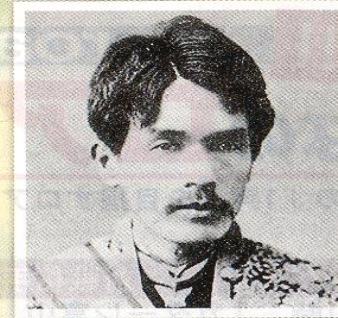


横井小楠

—その業績と生涯—

暗殺未遂事件の処罰により浪人となった小楠は、沼山津で静かに暮らしました。その間、坂本龍馬の来訪もありましたが、肥後藩の井上毅いの上 ごとしや元田永孚もと だ ながざねなども四時軒を訪れ、小楠と対談しています。



▲井上 毅 (国立国会図書館蔵)



▲元田 永孚 (国立国会図書館蔵)

19 沼山津隠棲

小楠は沼山津に隠棲いんせいしましたが、自分も学び、人をも教えようとする熱意は衰えることなく、門人への教導きょうどうは勿論、農民や漁夫、商人などに対しても、教しえを請こえば喜んで教しえ、また教わりもするという具合でした。さらに、国の政治のなりゆきについては常に心を配あっていました。小楠の長女みやみやの話によると、母から「お父様はどんな時でも天下国家のことをお忘れになることはなかったよ」とたびたび聞かされたそうです。

さて、元治元年(1864)秋、井上毅が友人と四時軒を訪れ、小楠と語り合っています。井上は肥後藩家老米田家の家臣で後に文部大臣になった人です。当時は藩校時習館じしゆくわんの居寮生きりやうせいでした。井上はその時の対談の内容を『沼山対話』(問答形式)に記しています。その内容は、学問のこと・宗教のこと・交易(貿易)のことなど、多方面にわたっています。

その一部を紹介しますと、学問について小楠は「まずあのれ己こじんに思う(自分で考えてみる)ことが大事で、分からない時に古人の説を参考にすべきである、また如何に多くの知識を得ても、活用しなければ意味がない。」と言っています。宗教については、井上から尋ねられたキリスト教と仏教の違いについて、その類似点や相違点を述べています。さらに交易については、「米づくりにかたよる農業だけでは生活に役立たず、また国内だけの流通では物が滞とどまってしまい、外国(西

洋)との交易が必要である。その場合、交易する国々が自国のことばかり考えて他国を顧みないということがないようにすることが大切である。」と小楠は強調しています。

次いで、慶応元年(1865)秋には元田永孚が四時軒在宅の小楠を訪れて対談し、元田は自ら筆記した『沼山閑話』を著しています。その内容から、宋儒(朱子学)の論じる政治は堯・舜・三代さんだいの政治と異なる、日本と西洋の学問は考え方に違いがある、幕府は私的政治を行ってはならないなどについて話し合ったことがわかります。

※井上毅(1843~95)…米田家の家塾必由堂ひつゆうどうで勉学、のち時習館で学ぶ。明治新政府の司法省に入り、ドイツに派遣される。大日本帝国憲法や教育勅語の起草(原案づくり)にあたり、第2次伊藤博文内閣の文部大臣に就く。

※元田永孚(1818~91)…肥後藩士(家禄550石)。時習館居寮生きりやうせいのとき、小楠と出会い、小楠らの儒学研究会の一員となる。のち高瀬藩奉行。明治4年(1871)宮内省に入り、明治天皇の侍講(学問を講義する職)となる。また、井上毅と教育勅語の起草にあたった。

※隠棲…世間から離れて静かに暮すこと。

※長女みや…小楠とつせ子には一男一女がいた。長男は時雄(1857年生まれ)、長女はみや(1862年生まれ)である。

※三代…大洪水を治めた禹の夏王朝、日々新たな気持ちで治世を行った湯王の殷王朝、太公望などを登用した文王・武王の周王朝。

このコーナーは、菅 秀隆さん(元横井小楠記念館長)が執筆しています。